

エンゲル係数からわかること

ぶぎん地域経済研究所 専務取締役／チーフエコノミスト 大西 浩一郎

この頃は、スーパーのレジで金額をいわれ、「思ったより高いなあ」と感じる事がしばしばです。そこで気になるのが、かつて習ったエンゲル係数です。これは家計（消費支出）に占める食料費の割合であり、高いと生活にゆとりがないとされます。総務省「家計調査」で公表されており、埼玉県ホームページでは「さいたま市」の時系列データをみることができます。

さて、そのエンゲル係数ですが、2024年、わが国では28.3%と1981年以来43年振りの高さとなりました。さいたま市でも上昇傾向を辿り、特に過去1年は大幅に上がりました（図表1）。エンゲル係数の上昇要因というと、人口動態の高齢化や賃金の伸び悩み、物価上昇などが挙げられます。

まず、高齢化が押し上げ要因であることは、「2人以上世帯（全体）」のエンゲル係数が「同（勤労者）」を一貫して上回っている点から説明できます。世帯主の平均年齢は、前者が60歳前後で後者が50歳前後となっていて、収入が下がるリタイア層を多く含む方が係数は高いというわけです。賃金に関しては、2025年春闘の賃上げ率が5.25%と34年振りの大きさとなるなど、むしろエンゲル係数を下げる方向に寄与しています。

物価上昇に関しては、品目別に掘り下げてみましょう（以下の計数は、各年の8月の後方12か月移動平均を基に計算）。さいたま市の2人以上世帯（全体）における食料支出は、過去1年間で+9.5%増加しましたが、品目別の寄与度をみると「外食」が+3.9%ポイントと

圧倒的に大きくなっています。これは、原材料仕入れ価格の上昇分に加えて、人件費の増加分も価格転嫁されているためであると考えられます。2番目の寄与は「穀類」の+1.8%ポイントであり、米価上昇の影響を如実に表しています（図表2）。

ところで長期的にみまると、高齢化という人口動態の変化のほかに、私たちの食に関する行動の変化もエンゲル係数を押し上げていることがわかります。20年前（2005年）と現在を比べてみまると、食料支出は+28.3%増加しており、その品目別寄与度の上位3品目は「調理食品」、「外食」、「菓子類」となっています。次に、この3品目が食料支出に占める構成比の20年間の変化をみまると、外食は昔も今も2割前後で大きな変化はありませんが、調理食品と菓子類の構成比は明確に上昇しています（それぞれ、+2.9%ポイント、+1.9%ポイント）。調理食品の寄与度と構成比の上昇は、女性の労働参加が拡大し、家事の担い手や料理にかかる手間ひまが変化したことを物語っています。また、菓子類の構成比上昇の背景は様々でしょうが、コンビニやドラッグストアで手軽に買えるようになったことや、「スイーツ」という言葉が一般化したことは要因としてカウントできると思います（図表3）。

このように、エンゲル係数の推移は私たちの行動の変化を映している面が多々あり、良くも悪くもわが身を振り返るきっかけになるようです。ちなみに、過去20年間で調理食品と菓子類の支出割合が上昇した裏で、魚介類と野菜・海藻の構成比は下がりました。なかなか難しい問題を突きつけられた気がします。

図表1. さいたま市のエンゲル係数の推移（後方12か月移動平均）



図表2. 食料支出の変化（%）

	食料支出の増減率	品目別寄与度
2024年→2025年	+9.5	外食+3.9、穀類+1.8、菓子類+0.7
2005年→2025年	+28.3	調理食品+7.0、外食+5.1、菓子類+4.4

図表3. 調理食品、外食、菓子類の構成比の変化（2005年→2025年、%）

調理食品	11.9 → 14.7 (+2.9)
外食	21.0 → 20.3 (▲0.6)
菓子類	6.7 → 8.7 (+1.9)

(注) 各年の値は8月の後方12か月移動平均